

平成 29 年度 通学区域の状況について【概要】

I 複数志願選抜の志願状況

[状況]

- 平成 29 年度の複数志願選抜においては、23,465 人が受検し 21,237 人が合格した。
- 旧学区外の高校を受検した生徒は 3,590 人(H28 年度 3,354 人)であり、複数志願選抜による受検者全体の 15.3%(H28 年度 14.0%)であった。
 - ◇第 1 学区 15.6% ◇第 2 学区 18.2% ◇第 3 学区 14.5%
 - ◇第 4 学区 11.6% ◇第 5 学区 5.6%
- 旧学区外の高校に合格した生徒は 3,029 人(H28 年度 2,825 人)であり、複数志願選抜による合格者全体の 14.3%(H28 年度 13.0%)であった。
 - ◇第 1 学区 14.8% ◇第 2 学区 17.2% ◇第 3 学区 13.5%
 - ◇第 4 学区 10.2% ◇第 5 学区 5.5%

[分析]

- 県下全体としては、旧学区外から受検した生徒の割合が、わずかながら増加した。
- 学区ごとの受検者の流動状況は、H28 年度と比べて特に大きな変化はない。

II アンケートの分析

1 進路選択に対する生徒等の意識及び理解と中学校における進路指導

[状況]

- 高校の選択肢が増えたことに対して、「よかった」「少しよかった」と感じた生徒は、H28 年度より約 12 ポイント増加 (60.0%→71.9%) した。
- 高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒は、H28 年度より約 3 ポイント増加 (78.3%→81.0%) した。
- 生徒が「高校の魅力・特色について関心を持つようになった」と感じた中学校長は、H28 年度より約 8 ポイント増加 (60.3%→68.2%) した。
- 高校の選択肢が増えたことで「どの高校を選ぶか悩む生徒が増えた」と感じた中学校長は、H28 年度より約 6 ポイント減少 (61.2%→55.1%) した。
- 生徒が「自分の将来や生き方を考えたうえで進路選択をするようになった」と感じた中学校長は、H28 年度より約 4 ポイント増加 (32.9%→37.3%) した。
- 生徒に進路を考えさせるキャリア教育を充実させた中学校は、H28 年度より 4 ポイント増加 (25.4%→29.4%) した。
- 中学校、高校間の情報交換の機会が増えたと感じた中学校長は、約 54%であり、H28 年度と同様の傾向であり、教員が直接高校を見に行くなど、教員同士の交流も増えつつある。
- 高校選択を決定する 3 年生の 12 月時点において、複数志願選抜の内容について、理解できていた生徒及び保護者の割合は、生徒は 97.4%(H28 年度 97.7%) で、保護者は 96.8% (H28 年度 96.5%) であり、理解が進んでいる。

[分析]

- 生徒は、再編以降、高校の魅力・特色を踏まえた、より主体的な高校選びをするようになっている。
- 中学校では、生徒が自分の生き方を考えた上で進路選択できるよう指導の充実に取り組むなど丁寧なキャリア教育を行っている。
- 中学生のみならず、保護者についても、複数志願選抜の内容に関する理解が進んでいる。

[今後の方向性]

- 中学校は、生徒及び保護者の進路希望を考慮しつつ、引き続きキャリア教育の充実に努める必要がある。
- 高校は、中学生、保護者及び中学校が求める魅力・特色に関する情報を、引き続き丁寧に提供していく必要がある。

2 生徒・保護者等の高校に関する情報に対する意識

[状況]

- ・生徒及び保護者が共通して求める高校の情報は、①入試方法や内容（生徒 41.1%、保護者 50.0%）、②校風・学校の雰囲気（生徒 26.1%、保護者 33.9%）、③進学や就職などの状況（生徒 23.7%、保護者 33.6%）、④コース・類型の内容（生徒 16.7%、保護者 26.4%）であり、H28年度と同様の傾向である。
- ・高校の情報について、中学3年生の夏休みまでに知りたかった生徒は71.3%、保護者は92.4%であったのに対し、実際にその時期までに知った生徒は51.3%、保護者は69.8%と、H28年度と同程度の差異があった。
- ・高等学校の説明会等に1～3回程度参加した保護者は61.5%であり、そこで知りたかった情報として、「校風・学校の雰囲気（50.8%）」、「進学や就職などの状況（36.3%）」、「入試方法や内容（28.4%）」「教育活動上の工夫（28.2%）」等を挙げている。
- ・通学区域や入試の内容の情報の主な入手先は、生徒・保護者ともに「中学校の先生（生徒 70.7%→68.4%、保護者 62.9%→60.1%）」からであり、生徒は、家族や親戚（32.8%→36.1%）、知人・先輩・友人（13.1%→14.3%）から高校の情報を得ようとする傾向が高まっている。
- ・中学校において生徒や保護者に対して説明が難しかった項目は、「志願変更（51.3%）」、「推薦入学と特色選抜の違い（39.7%）」、「合否判定（37.9%）」であった。
- ・説明が難しいと中学校長が感じていた「兵庫県収入証紙による入学考査料の納入（H27年度 52.5%→H29年度 25.1%）」、「旧学区外の高校に関する説明（H27年度 36.8%→H29年度 22.4%）」の割合は減少した。

[分析]

- ・生徒・保護者は、より高校の特色を知りたいと思っているが、実際に情報を得た時期は、希望どおりとなっていない傾向がある。
- ・生徒・保護者は、主に中学校の先生から情報を得ているが、オープン・ハイスクール等に参加して、校風・学校の雰囲気等の情報を直接得ようとする傾向が見られる。
- ・兵庫県収入証紙による入学考査料の納入等、通学区域の再編に伴い変更した制度の内容については、周知が進んでいる。

[今後の方向性]

- ・中学校は、今後も引き続き、生徒や保護者の知りたい情報やその時期を考慮し、PTA総会や夏休みの三者面談等の活用など、可能な限り早い段階での説明に努めることが必要である。
- ・高校は、オープン・ハイスクール等において、生徒会が主体となった説明の時間や交流の時間を設けたり、中学生に授業や部活動等を見学させるなど、さらなる高校紹介の工夫が必要である。

3 入学後の高校生活について

[状況]

- ・生徒のうち、現在の高校生活について「充実している」、「少し充実している」と回答した割合は、H28年度より約4ポイント減少（90.0%→86.5%）した。
- ・「充実していない」と回答した生徒（13.5%）は、その要因として「友人・先輩との関係（66.7%）」は増加したが、「部活動（17.9%）」、「授業（10.9%）」、「教科・科目の種類（7.1%）」は大きく減少した。
- ・保護者のうち、子どもが高校生活に「満足している」、「少し満足している」と回答した割合は、H28年度より約2ポイント減少（93.0%→91.3%）した。

[分析と今後の方向性]

- ・大多数の生徒は現在の高校生活が充実していると感じているが、1割程度の生徒は「充実していない」と感じていることから、高校において引き続き、これらの生徒の実態を的確に把握し、改善に努めることが必要である。

4 その他（中学校長から寄せられた主な意見）

- ・旧学区以外の高校を含め、行きたいと思う高校への進学を希望する生徒が増えた。
- ・オープン・ハイスクール等に参加して、高校の特色等に関する情報を得ようとする生徒が増えた。
- ・中学校間や教師間での情報交換の機会が格段に増えた。
- ・旧学区外の高校に関する情報収集を行い、高校の魅力・特色を踏まえて進路指導をするようになった。
- ・高校からの資料送付や高校担当者の学校訪問により、情報を得る機会が増えた。
- ・受検可能な高校が増えたことにより、生徒・保護者の情報収集に広く対応する必要がある。
- ・生徒が行きたいと思う高校が増えても、学区の端にあるため現実的に通学できない者もいる。